# 山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第99号

黒皮の手帳　角野栄子　2
特設展「宮沢賢治　保阪嘉内への手紙」展示資料より　3
津島佑子さんを悼む　坂上弘　4
寄贈資料より　4
教育普及事業報告　5
館からのご案内　6・7
資料翻刻　8
館の日誌・利用のご案内　8

特設展

## 「宮沢賢治　保阪嘉内への手紙」開催

平成二十八年七月九日（土）～八月二十八日（日）

童話や詩に独自の世界を切り開いた宮沢賢治（一八九六～一九三三）。無二の親友保阪嘉内（一八九六～一九三七）に宛てた手紙七十三点が平成二十七年、当館に寄託された。寄託後初めて全七十三点を公開し、賢治と嘉内の友情の軌跡をたどる。

宮沢賢治は岩手県稗貫郡川口町（現花巻市）に生まれた。一九一五（大正四）年、盛岡高等農林学校に進学、地質学や化学を学び、友人たちと同人誌「アザリア」を創刊する。その仲間の中で特に親しくなったのが、山梨県北巨摩郡駒井村（現韮崎市）出身の保阪嘉内だった。賢治と嘉内は寮の同室となり、ともに文学や哲学、宗教などを語り合う親友となった。しかし、一九一八年、嘉内は学校から除名処分を受ける。さらに同年、嘉内の母が死去し、二重の衝撃を受ける嘉内に、賢治は手紙を送り続け、力づけた。

二十代のほぼ十年間に書かれた手紙からは、若き日の二人の思いや夢、悩みなどが浮かび上がってくる。書簡のほか、保阪嘉内のスケッチブック、戯曲草稿なども展示する。

「アザリア」の仲間
1917（大正6）年
後列左　保阪嘉内
後列右　宮沢賢治

**■特設展関連イベント**

○渡辺えり講演会「宮沢賢治と保阪嘉内」
※要申込
7月10日（日）午後1時30分～
講師　渡辺えり（劇作家・演出家・女優）
参加費　無料
会場　講堂　定員　500名

○映画鑑賞会　申込不要
「銀河鉄道の夜」（アニメ）
原案　ますむらひろし
原作　宮沢賢治
1985年　107分
7月30日（土）午後1時30分～
会場　講堂　定員　500名

○子どもワークショップ　※要申込
・「ペーパークイリングで銀河鉄道の写真立てを作ろう！」
7月31日（日）午後1時30分～
講師　佐々木綾子（ペーパークイリング作家）
対象　小学校4年生以上15名
材料費　500円　会場　研修室
・『やまなし』の森の飛び出す絵本を作ろう！」※7月1日（金）申込開始
8月7日（日）午後1時30分～
講師　松下寛子（イラストレーター、豆本作家）
対象　小学生以上20名（低学年は保護者の付き添いが必要）
材料費　500円　会場　研修室

○移動プラネタリウムによる「二人の銀河鉄道～賢治と嘉内の青春」
※要申込
8月28日（日）①午前11時
②午後1時　③午後2時　④午後3時
お話　高橋真理子（星空工房アルリシャ）
参加費　無料
会場　研修室　定員　各回12名

○閲覧室資料紹介「宮沢賢治　童話の世界」
7月9日（土）～8月28日（日）
入場　無料
夏休みの子どもたちが楽しめる児童書、絵本、まんがを中心に、DVD、朗読CDなども紹介します。

○年間文学講座の御案内につきましては、5頁に掲載しております。
※要申込のイベントにつきましては、お電話か当館受付でお申込をお願いいたします。

### ホームページリニューアル

四月より当館ホームページがリニューアルされた。一部、英語に対応、展覧会やイベントなどの情報を発信していく。このほか、館内標識や英語の音声ガイド、無料Wi-Fi（無線LANサービス）も設置した。

### 予告　秋の企画展「北杜夫展」

9月17日（土）～11月23日（水・祝）
「楡家の人びと」や「どくとるマンボウ」シリーズで知られる小説家北杜夫の生涯と文学、辻邦生との交流、そして山梨とのかかわりを約一五〇点の資料により紹介。

# 黒皮の手帳

かどのえいこ

これは松本清張のミステリーではありません。ただの黒い皮の手帳のお話です。

二十五歳のとき、船で、地球の反対側まで、行ってしまったせいか、いつも「どこかに行きたい」という気持ちがあって、それから五十年余りにもなるのに、都合さえつけば、ドアを開けて、出かけていきます。例え、それが散歩でも、何処かへいくっていいものです。

そんな旅の間に、小耳に挟んだ短い言葉や、美味しかったものや、すれ違った、変な人の変なところなどを、書き留めたくなります。早く書かないと忘れてしまう。でもそういう時に限って、書く紙がないのです。すると、テッシュだって、箸袋だって構わず、のばして使う羽目になります。鉛筆がなけりゃ、眉墨だって引っ張り出してしまう。書いたら、ほっと一安心、大切にしまい込みます。しばらくして、あの紙切れに、たしかいいことと書いたはず…と、ハンドバッグのポケットをのぞき、本に挟んだのかと探しても、なぜか見つかりません。まるでいじわるでもするように、姿を消してしまうのです。ないとなると、途端に、ものすごくいいこと書いたような気がしてきます。なんだったけ…なんだったけ…頭の奥で必死に時間を巻き戻し、書き直しても、もう違うものになってしまい、あの時のライブ感はとりもどせません。

度々の失敗に懲りて、いつでも持ち歩けるようにと手帳を作ることにしました。サイズはバッグに入る文庫版。紙はけい線なしの、白。厚さは一センチ。たまたま柔らかい黒い皮を見つけたので、「黒革の手帳」になりました。でも上等な本革張りです。欲張って、五〇冊作りました。初めは白い紙に書くのがなにやらもったいないような気がして、頭で文章を考えてから、書いたりしていました。すると、なぜかメニューや箸袋に書いていたような、面白さがないのです。

「この手帳は『いたずらがき』専用。もったいないなんて思わずに、自由に、バンバン書くこと」

今ではどこにでも持っていきます。旅の合間の少しの時間でも、間に挟んだボールペンで、気になったことを、即、書き込みます。

古い手帳を開けてみると、あまりにも自由すぎて、なんのことやら分からなくなっているところがあります。謎めいた数字だったり、矢印だったり、バッテンだったり、「これから…どうしよう」なんていうセリフだったり、なにやら謎めいたメモでいっぱいです。もしかしたら、これはこれで、かの「黒革の手帳」のような、どきどきの物語に育っていくかも…本当にいい加減な手帳です。でも、いい加減を大事にしたいと、この手帳を作ったのですから、

コ・レ・デ・イ・イ・ノ・ダ！　です。

絵も描きます。旅に出たら、泊まったホテルの部屋の窓からみえた景色なんて最高です。窓の向こうは、時々刻々風景が変わります。一緒に聞こえてきた音や、思いついたことなど、漫画みたいに吹き出しなんか入れて、脈絡もなく書いていきます。あとで、みると、言葉が音になって聞こえてきたり、あたりの匂いまで感じられ、意外なライブ感に浸れます。

空港の乗り継ぎの待ち時間なんて、退屈なしの、ゴールデンタイムです。いろいろな人が動き回っているのですから、彼らを主人公に小さな物語まで生まれてきたりします。あの人をスパイにしたり、あの美しい人のこれからの運命は？…とか、とか。

誰にも見せるつもりがないのですから、書きたい放題です。上手も下手もありません。絵でも、詩でも、それこそため息でも、書いていいのです。すると、不思議に気持ちが落ち着いて、後になにがしか充実感が残ります。また、年月が経ってみると、こんなこと書いてる！なんて笑いの種にもなってくれます。

五十冊作った手帳も、あと三冊ぐらいしか残っていません。次はなに色にしようかな…でも厚さだけは半分にしたい。軽くしたつもりの手帳も、この頃、少し重く感じるようになりました。

（童話作家）

■特設展

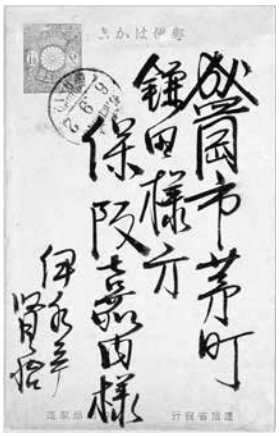
## 「宮沢賢治　保阪嘉内への手紙」展示資料より

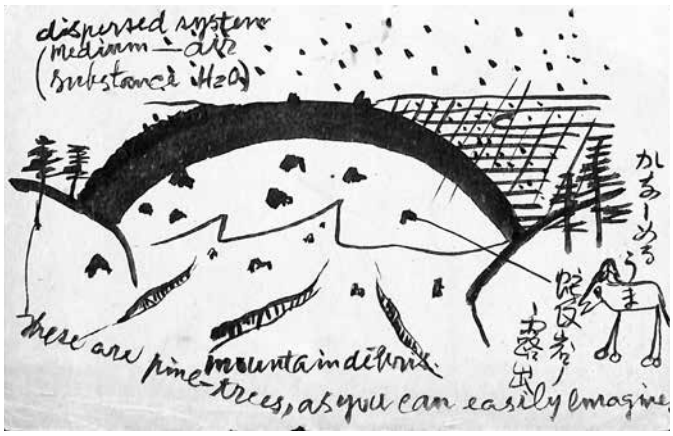
本展で展示する宮沢賢治から保阪嘉内に宛てた書簡は、賢治が盛岡高等農林学校在学中の一九一六（大正五）年から、稗貫農学校（のち花巻農学校）に勤務していた一九二五年までの間に出された七十三通。

これらの書簡については、嘉内の次男である保阪庸夫氏が小沢俊郎氏との共著として『宮澤賢治　友への手紙』（一九六八年　筑摩書房）で全文を翻刻・発表し、近年は『新校本宮沢賢治全集』第十五巻（一九九五年　筑摩書房）に収録された。この中から三点を取り上げて紹介する。

### ①　一九一七（大正六）年
### 九月二日消印　葉書

賢治が盛岡高等農林学校三年生の夏休みに嘉内へ送った葉書。種山ヶ原周辺のスケッチに、大気、動植物、蛇紋岩（じゃもんがん）の露出の様子などが、英語や化学記号とともに墨で書き込まれている。種山ヶ原は岩手県奥州市、気仙郡住田町、遠野市にまたがる物見山（種山）を頂点とした標高六〇〇から八七〇ｍに位置する高原地帯。左上「dispersed system (medium-air Substance $H_2O$)」は「拡散系（溶媒は空気　溶質は水）」、左下「These are pine-trees, as you can easily Imagine」は「すぐに御想像のつくとおり、これらは松の木立であります」、下中央「mountain debris」は「岩崩れ」の意。右下には「かなしめるうま」「蛇紋岩ノ露出」とある。





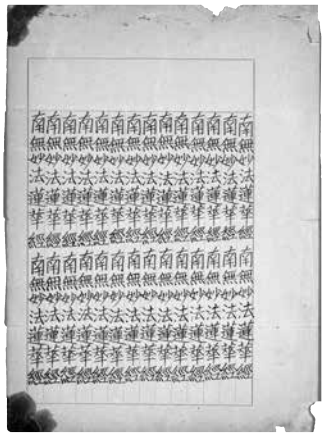

賢治　嘉内宛葉書　1917（大正６）年９月２日消印

### ②　一九一八（大正七）年
### 六月二十日前後（推定）封書

同人誌「アザリア」の仲間の河本義行から嘉内の母の死の知らせを受けるものの、信じられずにいること、そして、「何から何までどこの母な人よりもよく私を育てゝ呉れました」と、賢治自身の母への思いも綴られている。

最後に、別の知人より嘉内の母の死が本当だと知らされたこと、「南無妙法蓮華経」の題目が便箋一枚二段にわたり、丁寧に書き記されている。

この後、六月二十六日、二十七日にも、嘉内の母の死を悼み、嘉内を慰めようと賢治は手紙を送っている。



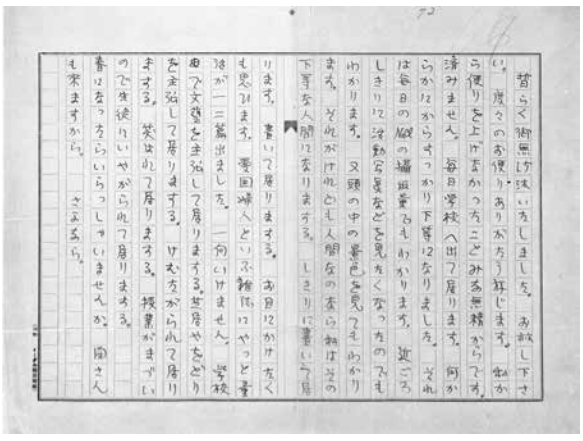
賢治　嘉内宛書簡　1918（大正７）年６月20日前後（推定）
１枚目と３枚目

### ③　一九二一（大正十）年
### 十二月（推定）封書

原稿用紙一枚に書かれた手紙は、賢治がこの月から教師として勤めた稗貫農学校での様子が記されている。

また、「しきりに書いて居ります。書いて居りまする。」と、創作への熱意を表している。「愛国婦人といふ雑誌にやっと童話が一二篇出ました」とあり、雑誌「愛国婦人」同年十二月号に童話「雪渡り」が掲載されたことから、本書簡は同年十二月頃のものと推定されている。

（学芸課　中野和子）



賢治　嘉内宛書簡　1921（大正10）年12月（推定）

■追悼　津島佑子

# 津島佑子さんを悼む

坂上　弘

二月十日にやまなし文学賞の選考会が神田の学士会館であり、佐伯一麦さんと私は、津島さんに逢えるものと思っていた。それが叶わず、二人だけで第一次選考を終えてから、津島さんが病床でつくられた選評を津島香以さんからの伝言で三枝館長から読み上げられた。津島さんらしいその場にいるような口調の評価で、よく彼女の応募作者への期待で逆転してしまうこともあったので耳をすませた。そして津島さんの評価もまったく一致していたので喜んだ。

津島さんはそれから一週間の後、二月十八日に亡くなられた。なんということだろう。三月十二日のやまなし文学賞表彰式では、文学館の講堂で、私は津島さんの急逝を皆様と悼み、選考での津島さんの新人たちへの力づよい支えのことばを伝えた。三枝館長の考えで津島さんの「火の山―山猿記」の朗読が、高校生の伊神智恵さんによってはじまった。津島さんの母方一族の人々への関心が、しっかりつたわる若々しい朗読は、作者がそこにいるようで、いつまでも聞いていたい気がした。

津島さんの作品は能のような不思議な雰囲気をもっている。樹や花のように思えることもある。山脈を見渡して溜息がでるような広大で深い光景をみたときのように思えることもある。津島さんは人々の物語を照らし出そうとする。そして小さなアイデンティティの中の光を自然に感じることもある。

やまなし文学賞の選考委員として年に一度お会いする以前から野間文芸賞の選考委員としてもお会いしてきて何年になるだろう。計算するとそれは十四年間も一緒にある緊張した時間を経験したことになる。津島さんは、納得できるかできないか、の評価で一度もぶれたことはない。

津島さんの作品は何かに追われて走りはじめたように自然に作られていく。私は『夜の光に追われて』や、『私』を、若い人たちと話すときにこのんであげてきたが、全体に共通しているのは、未知への好奇心だ。未知の自然への、歴史への、暗黒への、同胞への、小説家らしい勇気ある好奇心だ。

〈しかし、もちろん、なにもない状態で人間が生きつづける、などということは非現実的な話で、私の場合、井戸の底でしきりに、なぜ私は小説を書きつづけて生きてきたのだろう、なにを私は小説や詩に求めつづけていたのだろう、と考えないわけにもいかなかったのだ。〉（『夜の光に追われて』の講談社文芸文庫にある「著者から読者へ」から。）

また、

〈がらんどうになった家をたたきつぶすのは、おそらくあっという間に終わる。それなのに、この家をがらんどうにする仕事はなんてやっかいだったことだろう。〉（『私』の中の「マルハナバチ」の章より。）この『私』はケッサクだと思う。

『ジャッカ・ドフニ　海の記憶の物語』が遺作として出された。最近の津島さんは、愚直まる出しの人間とともに走っている。

エッセイ集の『夢の歌から』も遺作として出された。この中の「戦争の時間が流れて」を読みはじめると、もう、泪というか不思議な何かがこみ上げてきてとまらなくなった。そして、最後にある「母の声が聞こえる人々とともに」という津島香以さんの文にうたれた。津島さんの死が、語られ、津島さんの生がうかぶのが手にとるようにわかるからだ。

（作家）

## 「寄贈資料より」（二～四月）

○榎並和春氏より榎並和春画「山峡」挿絵原画19点。
○久保田二雄氏よりくぼたつぎお画「縁故節現世考」挿絵原画24点。
○石川旺氏より福島昌夫の雨宮庸蔵宛書簡。
○富川武史氏より「後藤淳史著『開国期徳川幕府の政治と外交』」抜き刷り。
○今川徳三「近藤勇」原稿など特殊資料96点、図書17点、視聴資料11点。
○秋山正統氏より秋山秋紅蓼「こんなに蝶のみだれとぶ秋が堪へかたいやうに晴れ」扇面など11点。
○小山弘明氏より「第六十回　連翹忌」リーフレットほか図書1点、視聴資料1点。

次の皆様からも図書・雑誌等を御寄贈いただきました。（敬称略）

飯島　泉　　関口　幸恵
いいだ　かずひこ　　田中　敏夫
石本　晴代　　中込　菊子
一瀬　公弘　　中村　吾郎
大森　一彦　　中山　博史
岡井　隆　　能村　研三
川島　秀一　　秦　恒平
近藤　栄治　　平松　伴子
榊原　智　　備仲　臣道
坂本　富江　　深見　けん二
佐野　つたえ　　山形　明夫
関口　稔夫　　山下　良枝
関口　恭代　　渡邉　弘

この他に団体の方々からも御寄贈いただいております。

■教育普及事業報告

○三枝浩樹初心者短歌教室

五月七日、二十八日の二回にわたり、山梨県歌人協会会長の三枝浩樹氏を講師とする初心者向けの短歌教室を実施した。

第一回は「歌を読む愉しさから始めよう」をテーマに短歌の基本について講義で学んだ。二回目は参加者の実作した歌をもとに講義が進められた。参加者から多くの質問が出され、講師の先生も熱心にお答えくださったため、二日間とも予定時間を超過するほどの充実した教室となった。

最終回の六月二十五日には参加者による歌会を実施する予定。

# 館からのご案内

■教育普及事業

○文学創作教室　要申込

「短歌講座」

・第1回　9月8日（木）
講師　三枝昂之（当館館長）

・第2回　11月26日（土）
講師　三枝浩樹（歌人）

いずれも午後1時30分～
会場　研修室　定員60名

※詳細はお問い合わせください。

○夏のワークショップ　要申込

・「大人も楽しめる～能を体験しよう！」
甲府市出身の能楽師・佐久間二郎さんを講師に迎え、実際に能を体験してみます。
7月27日（水）午後1時30分～
講師　佐久間二郎（観世流能楽師）
会場　県立美術館　総合実習室
定員30名　参加無料
持物　足袋または白い靴下、筆記用具

※詳細はお問い合わせください。

○年間文学講座　要申込

・講座1「甲州地誌『裏見寒話』―甲州の伝説をよむ
講師　長谷川千秋（山梨大学准教授）
6月18日（土）・7月2日（土）・8月27日（土）

・講座2「宮沢賢治童話の世界」
講師　牛山恵（都留文科大学名誉教授）
6月9日（木）・7月7日（木）・8月18日（木）
講座1・2とも午後2時～
会場　講堂　定員500名

・講座3　山梨の文学
「宮沢賢治　保阪嘉内への手紙を読む」
8月4日（木）午後2時～
講師　中野和子（当館学芸員）
会場　研修室（定員150名）

※要申込の催しにつきましては、お電話か当館受付でお申込をお願いいたします。

○子ども映画会　申込不要

・アニメ「鉄腕アトム」「緑の猫」
8月6日（土）午後1時30分～
会場　講堂　定員500名

■展示室

常設展

○第一～四室展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・夏の常設展
「与謝野晶子」
6月7日（火）～8月28日（日）

・秋の常設展
「武田泰淳と富士」
8月30日（火）～12月4日（日）

○第五室の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者104名を二期に分けて展示。
・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡
4月29日（金・祝）～8月28日（日）

・10月1日（土）からは、詩・短歌・俳句・川柳・漢詩のジャンルを展示します。

※第五室は、8月30日（火）～9月30日（金）は休室します。

■閲覧室

○閲覧室資料紹介

・「やまなしの文芸誌―私の表現世界」
6月19日（日）まで

・「宮沢賢治　童話の世界」
7月9日（土）～8月28日（日）

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

村岡花子（6月21日生まれ）
6月17日（金）～7月6日（水）

辻邦生（9月24日生まれ）
9月9日（金）～9月28日（水）

○書庫見学

6月11日（土）①午前11時～、②午後2時～

○第二十五回やまなし文学賞募集開始

六月一日より十一月三十日まで小説部門と研究・評論部門の応募を受け付けます。詳しくは文学館ホームページを御覧ください。

○前九十八号二頁の「秦富美子氏」は、正しくは「湊富美子氏」でした。ここにお詫びして訂正いたします。

# 資料翻刻

当館が所蔵する鈴木孝宛の半田良平書簡一通と窪田空穂書簡三通を飜刻する。

鈴木孝（一八九七～一九八〇）は山梨県笛吹市生まれ。英語教師のかたわら、「国民文学」で松村英一の選を受け、一九四八（昭和二十三）年に第一同人となる。許山茂隆と「沃野」「まひる野」の歌人を集め、一九五四年七月に「樹海」を創刊、主宰となった。歌集に『寒燈』（一九四九年十二月　国民文学社）、『丘のある街』（一九六六年十月　甲陽書房）などがある。

## 半田良平　鈴木孝宛書簡（封書）
## 一九三四（昭和九）年十月二十日

啓　その後御無沙汰してをります。本日は地産の葡萄を一箱御恵送下さいまして毎度ながらの御厚志のほど、お礼の申上げやうもございません。葡萄園を御案内いたゞいたことも随分昔となりました。秋になつて停車場にポスターを見る毎に、も一度お邪魔したいと考へつゝいつもそのまゝになつてしまひます。電気機関車が通じてから甲州も近くなつたやうな気が致しますので、何時でも伺へるやうに思ふのが却つて私を遠ざけてゐるのかも知れません。

実はこの夏、川崎兄の告別式に臨み、旧友岡田知事や塩尻の町長に二十年振りで会ひ、中央線を通つて帰つたのですが、塩尻から乗込んだ列車は新宿最終着である上に、郷里の伯父の初盆なのでその方に行かねばならず、先を急いだ為め日下部駅をそのまゝ素通りしてしまひました。

甲府あたりまで来た時にはまだ心が定まつて居なかつたので一寸した衝動にでも逢ふと、或は日下部駅へおりたかも知れませんでした。少ゝ薄暗がりの停車場構内を眺めつゝ、今頃貴兄は御在宅か、それともどこかの温泉にでも行かれて不在ではないかなどと空想してをりました。勝沼にかゝつて盆地にあかゝともる灯を眺め、笹子を越えて月夜の渓谷を車窓に眺めつゝ、新宿まで通してしまひました。今から思ふと残念で仕方ありません

この夏の私の旅行プランの一つには貴兄が歌に詠まれた雁坂越もあつたのですが、川崎兄の告別式といふやうな予想しない出来事もあつて、そのまゝになつてしまひました。

秋では時日もなし、金曜日の晩は夜学があつて出掛けられませんから、二日以上かゝる山旅は一寸無理です。それに近頃のやうに気持がせわしく、為事がたて込んで来ては余程の機会がないと出掛けられません。上越の宝川温泉へ行つたのなども夜学の教員の一泊旅行に参加したものなので、それも私一人が思ひ切つて決行したやうな訳です。尤も暇がないといへば、誰しも同じやうです。唯、私としましては学校が多摩川の下流に移り、往復の時間は合せて二時間半近く、その上、毎日午後三時半より早く帰れなくなつてしまつて、俸給はどん〳〵減らす癖に時間がかなり多くなつた為め、特にひどく感ぜられるやうな始末です。かうなると、私立学校などといふところは一番いけなく、この間も土屋文明君に一寸会つたとき、そんな話も出て苦笑したやうな訳です、成るべく時間の余裕を作つて自分の為事に専心するやう心掛けてはゐますが、却ゝ思ふやうに参りません。たゞ近頃は割合楽に歌が作れるやうになりました。それでこの機をはづさず作つて見ようと思つてをります。今夜、谷君宅で土曜短歌会といふのがあり、大阪の市村昌之君が目下上京してゐるので、国民文学でも古参株のものが集まることゝ思ひます。それで貴兄から戴いた葡萄を少し持参して皆のものに喜びを頒たうと存じます。寄せ書を差上げるつもりでをります。まづはお礼まで

十月二十日朝　　敬具

半田良平

鈴木詞兄

侍史

〈受〉山梨県東山梨郡加能岩町　鈴木孝様

〈発〉東京市淀橋区上落合一の四二七　半田良平

十月二十日　朝

〈翻刻者註〉縦二十二・四センチ、横十七・三センチの灰色罫線入便箋四枚に黒インク使用。三銭切手一枚貼付。「落合長崎9.10.20」の消印。

半田良平（一八八七～一九四五　栃木県生まれ）は、「国民文学」に一九一四（大正三）年六月の創刊から参加。「川崎兄」は八月十六日に死去した長野県松本市出身の「国民文学」同人・川崎杜外（とがい）。「谷君」は同じく同人の谷鼎。「日下部駅」は現在のＪＲ山梨市駅。半田は一九一五年から私立東京中学（現 東京高等学校）に教師として勤務していた。

## 窪田空穂　鈴木孝宛書簡（封書）
## 一九五四（昭和二十九）年十月十二日

啓上、今回は図らずも御身辺に私の歌碑が立つといふ成行きになり私としては感深いものがあります、それにつきあなたの御配慮の程は清水君からぽつゝゝと聞き、全体を知ることが出来ました、厚く謝意を表します。

楽しかつたのは、あたなと初めてお話する機会を得ましたことで、お宅にも伺ふを得て幾度もお目にかゝれ、印象深いものがあります。

これを御縁に又ゝお目に懸る機会を得たいものだと切望してをります。

御礼までに申上げます、頓首

十月十二日夜　　窪田空穂

鈴木様

几下

奥様に宜しく願ひます

〈受〉山梨市日下部駅前　鈴木孝様

〈発〉十月十二日　東京都文京区雑司ヶ谷町八八　窪田空穂

〈翻刻者註〉縦二十五センチ、横十七・五センチの無地便箋一枚に黒インク使用。十円切手一枚貼付。「小石川29.10.12」の消印。

山梨高等学校文芸部が中心となって山梨市塔の山に建立した空穂の歌碑「兄かはに並ぶ弟川ほそ〳〵と青山峡を流れてくたる」の序幕式が、一九五四（昭和二十九）年十月九日午後二時から、山梨市差出の磯で行われた。午前中には山梨高校講堂において空穂、窪田章一郎、中村白葉の講演会があり、序幕式の後には「さしで小林」に六十余名が集まり、空穂を囲んだ親睦会が開かれた。翌日には、樹海社主催による空穂の講演会と松村英一選の歌会が甲府市の医師会館二階ホールで行われ、夜七時からは甲府市湯村の常磐ホテルで有志の晩餐会が催された。空穂は翌十一日に甲府の御嶽昇仙峡を訪れ、甲府駅午後四時発の汽車で帰京している。「清水君」は山梨高校文芸部の指導教員で「まひる野」に出詠し、「樹海」の編集委員でもあった清水賢一。

## 窪田空穂　鈴木孝宛書簡（葉書）
## 一九五五（昭和三十）年五月二十七日

小生の選歌評完結になつたことを知りました、永い間御苦労でした、選歌、評ともに、小生には適切なものでした、一見らくなものに見えますが、実は困難であることを、小生体験によつて承知しております、御苦労であつたことに対して感謝いたします。

御自愛を祈ります。五月廿七日

〈受〉山梨市日下部駅前　鈴木孝様

〈発〉東京文京区雑司ヶ谷町八八　窪田空穂

〈翻刻者註〉五円の郵便はがきに黒インク使用。「小石川30.5.28」の消印。

鈴木は「樹海」創刊号（一九五四年七月）から第十二号（一九五五年六月）まで、十二回にわたって「現代秀歌鑑賞　窪田空穂篇」を発表。毎回五首から十首ほどの歌について鑑賞文を寄せた。

## 窪田空穂　鈴木孝宛書簡（封書）
## 一九五五（昭和三十）（推定）年十月十二日

拝復　却って御挨拶に預り恐縮です、その際は御世話に預りました、人寄せのうるさゝは承知してゐますので、御迷惑の事だつたらうと察し上げます。行きは甲州街道でしたが、帰りは車体の動揺を減らさうと御坂越えをしました、重労働でしたが割合に労れず、途中の風光は結構リクレエシヨンになりました。

御歌、即詠としては結構です、文句を加へる所がありません。

房長くと、房しげみ、連作としての変化をつけようとして、あのようにしたものと思はれます、独立した一首としては長くの方がいゝのですが、連作とするとしげみとしなくてはならなかつたと見えます、それだと問題は、独立の歌と連作の歌といふことになり、範囲がちがつて来ます、その意味で問題とする価値がありましょう。不尽

十月十二日　　空穂

鈴木様

几下

家内、伜よりも宜しくと申出ました

〈受〉山梨市日下部駅前　鈴木孝様

〈発〉十月十二日　東京文京区雑司ヶ谷八八　窪田空穂

〈翻刻者註〉「相馬屋製」黄土色罫二百字詰め原稿用紙二枚に黒インク使用。十円切手一枚貼付。「小石川□.10.12」の消印（年の十の位は「3」で一の位が判読不能）。一九五五年十月九日、午後一時から甲州市勝沼町の宮光園で空穂の歌碑「琥珀なし垂るる葡萄の房しげみこの園に入れば空のあらずも」の序幕式が行われた。空穂夫妻、窪田章一郎夫妻、前田晁、中村星湖、都筑省吾らが出席。午前中は、まひる野主催、樹海社協賛の歌会が開かれた。

（翻刻者　学芸課　保坂雅子）

# 館の日誌

3・12(土)　やまなし文学賞表彰式
4・22(金)　閲覧室　文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「木々高太郎」～5・12(木)
4・29(金)　特設展「辻嵐外　甲州の近世俳人」開始～6・19(日)
閲覧室資料紹介
「やまなしの文芸同人誌―私の表現世界―」～6・19(日)
茶室「素心菴」にて呈茶
5・4(水)　茶室「素心菴」にて呈茶
5・7(土)　文学創作教室「初心者短歌教室」第1回
講師　三枝浩樹(歌人)
5・8(日)　第一回読書会
5・12(木)　年間文学講座Ⅱ「二人の紳士に仕掛けられた山猫の罠―『注文の多い料理店』」
講師　牛山恵(都留文科大学名誉教授)
5・14(土)　特設展関連講座「辻嵐外の句と画の魅力 」
講師　高室有子(当館学芸幹)
5・15(日)　名作映画鑑賞会「居酒屋兆治」
5・21(土)　年間文学講座Ⅰ「甲州の文化・こころを伝える―『裏見寒話』の世界」
講師　長谷川千秋(山梨大学准教授)
5・22(日)　特設展関連ワークショップ
「嵐外の梅の花―つまみ細工でおしゃれ巾着を作ろう」講師　飯島薫(洋風つまみ細工作家)
5・27(金)　閲覧室　文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「新田次郎」～6・9(木)
5・28(土)　文学創作教室「初心者短歌教室」第2回
講師　三枝浩樹(歌人)
5・29(日)　文学創作教室・高校生文学創作教室「映画と文学」
講師　成島出(映画監督)
6・1(水)　やまなし文学賞募集開始
6・5(日)　茶室「素心菴」にて呈茶
6・7(火)　期間限定常設展示「与謝野晶子」～8・28(日)
6・9(木)　年間文学講座Ⅱ「恐怖と感動の賢治ワールド―賢治童話の魅力と作品群」
講師　牛山恵(都留文科大学名誉教授)

# 利用のご案内

■開館時間
○展示室　9：00～17：00（入室は16：30まで）
○閲覧室・研究室　9：00～19：00（土・日・祝日は18：00まで）
○講　堂・研修室　9：00～21：00
○茶　室　9：00～21：00（準備・片付けの時間も含みます）
○ミュージアムショップ　9：30～16：20

■休館日（7月～9月）
○7月4・11・25日
○8月1・22・29日
○9月5・12・20・26日

■常設展観覧料

| | 個　人 | 団　体（20名以上） | 美術館共通券 |
|---|---|---|---|
| 一　般 | 320円 | 250円 | 670円 |
| 大学生 | 210円 | 170円 | 340円 |

※65歳以上の方、障害者及び介護者、並びに高校生以下の児童・生徒の観覧料は無料です。

■施設利用のお申込について
○講堂・研修室・研究室・茶室のお申込は、使用する日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの際、ご説明いたします。

■アクセス
**中央自動車道甲府昭和ＩＣから**
料金所を昇仙峡・湯村方面へ出、200m先左折、徳行立体南交差点左折、アルプス通りを約2㎞直進、貢川交番前交差点左折、国道52号を韮崎方面約1㎞左側。

**JR中央本線甲府駅から**
南口バスターミナルより「貢川団地」、「大草経由韮崎駅」、「竜王駅経由敷島営業所」、「御勅使」行のいずれかで約15分。「県立美術館」下車（料金280円）。タクシーで約15分（料金1,700円程度）。

■年間フリーパスポート（定期観覧券）のご案内
文学館常設展・企画展を1年間何回でも観覧できる年間フリーパスポート（定期観覧券）を発売しています。料金は、一般1,540円、大学生770円です。

■県内宿泊施設利用者割引のご案内
山梨県内の宿泊施設へ宿泊または宿泊予約された方で、宿泊当日または翌日に観覧される場合、個人でも団体料金でご観覧いただけます。宿泊（予定）を証明するもの（領収書・予約クーポン券等）を窓口へ提示してください。なお20名様以上の団体は対象になりません。

山梨県立文学館　館報　第99号
平成28年6月10日発行
編集兼発行人　三　枝　昂　之
発行所　山梨県立文学館
〒400－0065
山梨県甲府市貢川一丁目5－35
☎055(235)8080　FAX 055(226)9032
http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/
※紙面の無断転載はお断りします。